下野市立石橋北小学校

１　学校課題

（１）研究主題

主体的に学び、高め合う児童の育成

～「わかる」「できる」が実感できる授業をめざして～

（２）主題設定について

次期学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現により、児童に「生きる力」を育むことを目指した授業改善が求められている。このことを視野に入れ、これまでの本校の特色でもあるＩＣＴ機器の活用や学校課題研究の成果を生かしつつ、児童が「わかる」楽しさや「できる」喜びが実感できる授業の展開を行うことで、成就感や達成感を得て、学習意欲が高められ、主体的に学びに向かうことができるのではないかと考えた。

この研究テーマは、昨年度からのものであるが、本年度は、どの学年でも学習している教科であり、児童が「わかる・できる」が実感しやすい算数科を中心として研究を進めてきた。

２　研究計画

（１）全校体制での研究実践

・授業研究部（授業実践に関わる）と研究調査部（学習に関わる調査や資料保管等）とに分けての研究推進

・内容を絞っての系統立てた授業実践による研究

・授業研究会の成果と課題を、日頃の授業で生かす工夫

（２）校内研究会

・S&U コラボ、共同訪問での授業検討会や授業実践

・一人一授業の実践と公開、授業研究会の実践

（３）ＩＣＴ機器等の効果的活用（これまでの研究の成果の活用）

・学習効果を高めるためのＩＣＴ機器の効果的な活用の工夫

３　研究の内容

（１）具体策

	内容	具体策
(1)学習意欲を高め主体的に学びに向かうことができる授業の工夫（授業力の向上）	①自ら目的意識や課題意識（疑問・問い）を持たせる導入	ア、具体的な活動（体験活動、教材、具体物の活用、イメージ化できる図や数直線などの活用） イ、ＩＣＴの活用（パソコン、タブレット、デジタル教科書）
	②自分なりに、問題の解決への見通しを持たせる活動	ア、既習内容や経験と結びつけた題材 イ、解決の必要感のある対象物の選択 ウ、個別解決のための時間の確保
(2)学習集団での、互いの有効な関わり合いを生み出す工夫	①安心して学ぶことのできる学習集団づくり	ア、Ｑ－Ｕの実施・結果分析による学習集団づくり イ、互いのよさを生かし、他を認め合う学級経営
	②個のよさを生かす学習形態や学習活動	ア、学習形態の工夫による学び合いと時間の確保（小集団による交流、協力） イ、ＩＣＴ活用などによる個人の考えの表現の工夫（タブレットによる提示）
(3)達成感や喜びのある授業の工夫	①達成感や成就感を得られる教材の工夫・改善と活用	ア、教材の収集・開発・作成・管理・活用など（プリント作成、教材コンテンツ活用） イ、学力テスト結果分析と改善
	②学年に応じた家庭学習の充実（基礎学力と学習習慣の充実）	ア、家庭学習のガイドラインやモデルの提示と実践 イ、授業との関連を図った家庭学習の工夫

（２）主な実践授業（算数）

月/日	学年	形態	単元名	課題追究のための手立て等
7/ 4	６年	S&U	「駅までは何 km あるんだろう」(「速さ」) 指導者：宇都宮大学教育学部附属小学校 教諭　神保　元康先生（示範授業者）	・課題提示の工夫：誤った考え方の提示によって、話し合う集団づくりや説明する力を伸ばす効果
10/ 24	４年	校内	「面積」	・図形カードの活用によるイメージ化、ペア学習、タブレット活用
11/ 19	３年	共同訪問	「重さ」	・身のまわりにある具体物による体験を通して任意単位の理解
12/ 3	５年	校内	「割合」	・既習内容の活用による自力解決 ・お互いの考えの交流
12/ 10	４年	S&U	「変わり方」 指導者：宇都宮大学教育学部教育学研究科 教授　日野　圭子先生	・具体物（ジオボード）の活用 ・課題提示の工夫（興味・関心） ・考えの交流の工夫
1/ 11	個支 ６年	校内	「変わり方」	・動きや音声のあるＰＣソフト活用による意欲付け
1/ 31	個支 4･5年	校内	「立体」（４年） 「角柱と円柱」（５年）	・同一時間２学年授業の工夫 ・具体物操作と個に応じた教材

≪算数以外の主な授業（学校課題との関連）≫

１１／１９日（共同訪問）　１年国語「よく見てかこう『しらせたいな、見せたいな』」
６年道徳「命を見つめて」

（３）「わかる」「できる」につながる家庭学習の習慣化

・家庭学習状況調査・・・家庭学習の内容や時間、提出状況等を、学年ごとに把握し、家庭への啓発や児童への支援の手立てに活用した。

・家庭学習強調週間・・・児童の家庭学習の奨励と保護者への啓発及び協力をねらい、月１回中学校の定期テストや小中一貫教育の日を含む週に実施した。

（４）本校の学校課題研究によって目指す児童像の検討と設定

学校課題研究によって、どのような児童になることを目指すのかを全員で検討・確認した。

本校の学校課題研究によって目指す児童像	
・課題を自分のものとしてとらえ、解決に向けて取り組み、深く学ぶことを楽しむ子ども ・互いによさを認め合い、高め合う子ども ・授業で「わかった」「できた」と実感できる子ども	
高学年	・既習したことを活用し、さらに広げ自らの学習に生かせる子ども
中学年	・これまでの経験や既習したことを生かし、活用できる子ども
低学年	・基礎的な知識・技能を身に付けることができる子ども

４　成果と課題

（１）成果

・授業の導入では、児童の生活経験や体験、既習事項などの実態を把握することが大切である。その上で、具体的な場面の提示や児童の予想に反する誤った考え方を示すなどの工夫が、児童のイメージ化を促したり、興味や関心を高め、多様な考えと活発な意見の交流を生む。このような活動の中で、児童は、自分の持つ知識にふれたり、重なったりしたとき「わかった」と感じることが分かってきた。

・授業設計では、展開や教材教具、発問など、グループで教材研究を行い、児童の実態に合う考えや方法を取り入れ、学習活動を活性化させることができ、授業力が向上した。

（２）課題

・算数科として、「考えを深める場」で、図や表、言葉、式などを繋いでいき、表現していくことができる指導法や、課題意識の持たせ方、見通しを持って課題に取り組むこと、導入の発問の工夫等を研究したい。

・本年度検討・確認した「目指す児童像」をより意識した授業づくりをしたい。

・家庭学習や朝の学習の効果的な取り組み方の工夫をしたい。